

## [11] ギニアビサウ

### 1. ギニアビサウの概要と開発課題

#### (1) 概要

ギニアビサウでは、1990年代から複数政党制の導入など民主化に向けた動きが見られたが、1998年6月に軍の反乱により大統領が亡命し、その後の政権でも首相、閣僚が頻繁に交代するなど政情は安定しなかった。2003年9月に、軍部による無血クーデターが発生し、その後、ロサ臨時大統領及びサーニャ臨時首相から成る暫定政府が成立した。2004年3月には民主的な国民議会選挙が実施され、ゴメス首相を首班とする内閣が発足した。2005年6～7月には大統領選挙が行われ、同年10月、ジョアオ・ベルナルド・ヴィエイラ元大統領が大統領に就任、同年11月アリスティデス・ゴメス内閣が発足した。その後、2007年4月、同内閣への不信任決議が出され、4月に大統領及び反大統領派の妥協によりカビ新内閣が成立した。

ギニアビサウは、農業が労働人口の約8割、国内総生産（GDP）の約6割を占めており、主要輸出品はカシューナッツである。1980年以降、市場経済化の導入、民営化の促進等を目指したが、一人当たりのGNIは180米ドル（2005年）、人間開発指数は177か国中175位（2005年）と世界の最貧国の1つである。さらに、1998年から1999年にかけての内戦により、同国では、公共施設、学校、病院などインフラが徹底的に破壊された。内戦後も、財政難により公務員に対する給与の遅配が恒常化している。

#### (2) PRSP

ギニアビサウが策定したPRSP（2006年最終版）は、(イ)ガバナンス強化、行政近代化及びマクロ経済安定化、(ロ)経済成長拡大及び雇用創出、(ハ)社会サービス及び基礎的インフラへのアクセス向上、(ニ)弱者層の生活環境の向上の4点を軸に据え、具体的な数値目標として、2015年までに貧困層を60パーセント以下に削減する、2015年までに基礎教育への就学率をほぼ100パーセントにする、2015年までに乳幼児死亡率を1,000人中80人以下にすることを定めている。

表-1 主要経済指標等

指 標		2005年	1990年
人 口 (百万人)		1.6	1.0
出生時の平均余命 (年)		45	42
G N I	総 額 (百万ドル)	289.11	233.32
	一人あたり (ドル)	180	220
経済成長率 (%)		3.5	6.1
経常収支 (百万ドル)		—	-45.29
失 業 率 (%)		—	—
対外債務残高 (百万ドル)		692.70	692.14
貿 易 額 <sup>注1)</sup>	輸 出 (百万ドル)	—	26.10
	輸 入 (百万ドル)	—	88.17
	貿易収支 (百万ドル)	—	-62.07
政府予算規模 (歳入) (CFAフラン)		—	—
財政収支 (CFAフラン)		—	—
債務返済比率 (DSR) (対GNI比, %)		11.3	3.6
財政収支 (対GDP比, %)		—	—
債務 (対GNI比, %)		289.8	—
債務残高 (対輸出比, %)		660.1	—
教育への公的支出割合 (対GDP比, %)		—	—
保健医療への公的支出割合 (対GDP比, %)		—	—
軍事支出割合 (対GDP比, %)		—	—
援助受取総額 (支出純額百万ドル)		79.12	126.35
面 積 (1000km <sup>2</sup> ) <sup>注2)</sup>		36	
分 類	D A C	後発開発途上国 (LDC)	
	世界銀行等	IDA融資適格国、もしくはIBRD融資適格国 (償還期間20年)	
貧困削減戦略文書 (PRSP) 策定状況		PRSP策定済 (2007年5月) / HIPC	
その他の重要な開発計画等		—	

注) 1. 貿易額は、輸出入いずれもFOB価格。

2. 面積については“Surface Area”の値 (湖沼等を含む) を示している。

表-2 我が国との関係

指 標		2006年	1990年
貿易額	対日輸出 (百万円)	3.86	22.26
	対日輸入 (百万円)	25.19	1,769.29
	対日収支 (百万円)	-21.33	-1,747.03
我が国による直接投資 (百万ドル)		—	—
進出日本企業数		—	—
ギニアビサウに在留する日本人数 (人)		—	—
日本に在留するギニアビサウ人数 (人)		3	—

## ギニアビサウ

表-3 主要開発指数

開 発 指 標		最新年	1990年
極度の貧困の削減と飢饉の撲滅	所得が1日1ドル未満の人口割合 (%)	—	
	下位20%の人口の所得又は消費割合 (%)	5.2(1993年)	
	5歳未満児栄養失調割合 (%)	25(1996-2005年)	
初等教育の完全普及の達成	成人(15歳以上)識字率 (%)	—	—
	初等教育就学率 (%)	45(2004年)	38(1991年)
ジェンダーの平等の推進と女性の地位の向上	女子生徒の男子生徒に対する比率(初等教育)	0.71(2005年)	
	女性識字率の男性に対する比率(15~24歳) (%)	—	
乳幼児死亡率の削減	乳児死亡率 (出生1000件あたり)	124(2005年)	—
	5歳未満児死亡率 (出生1000件あたり)	200(2005年)	—
妊産婦の健康改善	妊産婦死亡率 (出生10万件あたり)	1,100(2005年)	
HIV/エイズ、マラリア、その他の疾病の蔓延防止	成人(15~49歳)のエイズ感染率 <sup>(B)</sup> (%)	3.8 [2.1-6.0](2005年)	
	結核患者数 (10万人あたり)	293(2005年)	
	マラリア患者数 (10万人あたり)	2,421(1999年)	
環境の持続可能性の確保	改善された水源を継続して利用できる人口 (%)	59(2004年)	—
	改善された衛生設備を継続して利用できる人口 (%)	35(2004年)	—
開発のためのグローバルパートナーシップの推進	債務元利支払金総額割合 (財・サービスの輸出と海外純所得に占める%)	10.8(2005年)	3.5
人間開発指数 (HDI)		0.374(2005年)	0.322

注) [ ]内は範囲推計値。

## 2. ギニアビサウに対するODAの考え方

### (1) ギニアビサウに対するODAの意義

ギニアビサウは、人国の6割以上が絶対的貧困にあるなど世界の最貧国の1つであり、電気、水道、病院、学校を含め基礎的インフラが全く整備されていない。また、クーデターや内戦が相次いだ結果、インフラの破壊や地雷による被害が続いており、こうした内政状況の不安定が、更なる貧困を招くという悪循環を生み出している。こうした問題に対し、ギニアビサウ自身の取組をODAで支援することは、ODA大綱の重点課題である「貧困削減」と「平和の構築」の観点から意義が大きい。

### (2) ギニアビサウに対するODAの基本方針

我が国は、従来、ギニアビサウに対し、研修員受入等の技術協力及び食糧増産援助、水産、水供給分野等の無償資金協力や構造調整支援のためのノン・プロジェクト無償援助を実施してきたが、1998年6月に発生した内乱が長期化し、また2003年9月のクーデター後は、当時の政府を承認していなかったため、政情・治安情勢にかんがみ、国際機関を通じた援助に限定して実施してきた。

2005年の大統領就任により暫定統治期間が終了したため、我が国は2006年1月27日に正常な政府間関係を回復した。今後は、先方政府との協議に基づき同国の開発ニーズ及び治安等をふまえた上で、同国国民に直接裨益する基礎的生活分野を中心に支援を検討する方針である。

### (3) 重点分野

我が国は、98年の内戦後、国際機関を通じた協力を実施してきた。2005年、国連小型武器基金より、約0.3百万米ドルを国連の実施する小型武器プロジェクトに、また、人間の安全保障基金より、約1.50百万米ドルを国連人道問題調整事務所の実施する統合地域情報ネットワーク(IRIN)ラジオ事業に拠出した。2006年には、WFPを通じた食糧援助に加え、農業、保健医療、水産分野等の研修員を受け入れている。

### 3. ギニアビサウに対する2006年度ODA実績

#### (1) 総論

2006年度のギニアビサウに対する無償資金協力は1.10億円(交換公文ベース)、技術協力は0.01億円(JICA経費実績ベース)であった。2006年度までの援助実績は、無償資金協力109.12億円(交換公文ベース)、技術協力5.09億円(JICA経費実績ベース)である。

#### (2) 無償資金協力

2006年度には、同国の貧困層を中心とする慢性的な食糧不足にかんがみ、WFPを経由した食糧援助を実施した。

#### (3) 技術協力

2006年度は、保健・医療、農業等の分野で3名の研修員受入を実施した。

### 5. 留意点

ギニアビサウでは、現在首都ビサウの治安は平穏を取り戻しているものの、公務員給与の長期間未払い等潜在的な不安定化要因もあることから、援助の実施に際しては渡航情報等に注意する。

表-4 我が国の年度別・援助形態別実績(円借款・無償資金協力年度E/Nベース、技術協力年度経費ベース)  
(単位:億円)

年度	円借款	無償資金協力	技術協力
2002年	—	—	0.10 (0.10)
2003年	—	—	0.07 (0.07)
2004年	—	—	0.03 (0.03)
2005年	—	—	0.04 (0.04)
2006年	—	1.10	0.01
累計	—	109.12	5.09

- 注) 1. 年度の区分は、円借款及び無償資金協力は原則として交換公文ベース、技術協力は予算年度による。  
2. 「金額」は、円借款及び無償資金協力は交換公文ベース、技術協力はJICA経費実績及び各府省庁・各都道府県等の技術協力経費実績ベースによる。  
3. 2002～2005年度の技術協力においては、日本全体の技術協力事業の実績であり、2002～2005年度の( )内はJICAが実施している技術協力事業の実績。なお、2006年度の日本全体の実績については集計中であるため、JICA実績のみを示し、累計についてはJICAが実施している技術協力事業の実績の累計となっている。

表-5 我が国の対ギニアビサウ経済協力実績

(支出純額ベース、単位:百万ドル)

暦年	政府貸付等	無償資金協力	技術協力	合計
2002年	—	—	0.12	0.12
2003年	—	—	0.06	0.06
2004年	—	—	0.01	0.01
2005年	—	—	0.03	0.03
2006年	—	—	0.04	0.04
累計	—	69.41	4.58	73.99

出典) OECD/DAC

- 注) 1. 政府貸付等及び無償資金協力はこれまでに交換公文で決定した約束額のうち当該暦年中に実際に供与された金額(政府貸付等については、ギニアビサウ側の返済金額を差し引いた金額)。  
2. 技術協力は、JICAによるもののほか、関係省庁及び地方自治体による技術協力を含む。  
3. 四捨五入の関係上、合計が一致しないことがある。

## ギニアビサウ

表-6 諸外国の対ギニアビサウ経済協力実績

(支出純額ベース、単位：百万ドル)

暦年	1位	2位	3位	4位	5位	うち日本	合計
2001年	ポルトガル 13.38	オランダ 8.00	フランス 3.85	スウェーデン 2.06	スペイン 0.77	0.18	30.38
2002年	ポルトガル 6.64	フランス 3.95	米国 3.75	オランダ 3.60	ベルギー 2.18	0.12	25.80
2003年	イタリア 70.10	ポルトガル 8.25	オランダ 5.11	フランス 3.61	米国 2.37	0.06	97.55
2004年	ポルトガル 12.13	フランス 5.38	オランダ 3.29	スウェーデン 2.37	スペイン 1.46	0.01	28.56
2005年	フランス 15.60	ポルトガル 13.52	オランダ 2.62	スペイン 2.25	カナダ 1.96	0.03	39.41

出典) OECD/DAC

表-7 国際機関の対ギニアビサウ経済協力実績

(支出純額ベース、単位：百万ドル)

暦年	1位	2位	3位	4位	5位	その他	合計
2001年	CEC 17.95	IDA 5.50	UNTA 1.47	AfDF 1.16	WFP 1.01	1.72	28.81
2002年	CEC 22.27	IDA 5.10	UNDP 2.31	UNTA 1.84	WFP 1.68	0.34	33.54
2003年	CEC 19.79	IDA 12.55	AfDF 5.92	UNDP 2.43	UNTA 2.06	4.87	47.62
2004年	IDA 25.55	CEC 14.12	UNDP 2.56	WFP 2.17	AfDF 2.05	1.99	48.44
2005年	CEC 16.26	IDA 12.86	UNDP 2.66	WFP 2.07	UNTA 2.02	3.76	39.63

出典) OECD/DAC

注) 順位は主要な国際機関についてのものを示している。

表-8 我が国の年度別・形態別実績詳細 (円借款・無償資金協力年度E/Nベース、技術協力年度経費ベース)

(単位：億円)

年度	円借款	無償資金協力	技術協力
2001年度までの累計	なし	108.02億円 (内訳は、2006年版の国別データブック、もしくはホームページ参照 ( <a href="http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/jisseki.html">http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/jisseki.html</a> ))	4.85億円 研修員受入 59人 専門家派遣 3人 調査団派遣 46人 機材供与 15.84百万円
2002年	なし	なし	0.10億円 (0.10億円) 研修員受入 8人 (8人)
2003年	なし	なし	0.07億円 (0.07億円) 研修員受入 7人 (7人)
2004年	なし	なし	0.03億円 (0.03億円) 研修員受入 6人 (6人)
2005年	なし	なし	0.04億円 (0.04億円) 研修員受入 7人 (7人) 留学生受入 1人
2006年	なし	1.10億円 (1.10) 食糧援助 (WFP経由)	0.01億円 研修員受入 3人
2006年度までの累計	なし	109.12億円	5.09億円 研修員受入 90人 専門家派遣 3人 調査団派遣 46人 機材供与 15.84百万円

注) 1. 年度の区分は、円借款及び無償資金協力は原則として交換公文ベース、技術協力は予算年度による。

2. 「金額」は、円借款及び無償資金協力は交換公文ベース、技術協力はJICA経費実績及び各府省庁・各都道府県等の技術協力経費実績ベースによる。

3. 2002～2005年度の技術協力においては、日本全体の技術協力の実績であり、2002～2005年度の( )内はJICAが実施している技術協力事業の実績。なお、2006年度の日本全体の実績については集計中であるため、JICA実績のみを示し、累計についてはJICAが実施している技術協力事業の実績の累計となっている。

4. 調査団派遣にはプロジェクトファイディング調査、評価調査、基礎調査研究、委託調査等の各種調査・研究を含む。

5. 四捨五入の関係上、累計が一致しないことがある。